夢に進む少年

名ヶ共　隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢に進む少年

【Ｎコード】
Ｎ９３３７Ｍ

【作者名】
名ヶ共　隼

【あらすじ】
急激な軍事化と、インターネットの発達した日本。そんな世界の住人の一人、大城幸斗〔おおしろゆきと〕その少年は人並みに、好きな女の子、夢はあった。しかし、彼は体が小柄で、どちらかというと地味でクラスメイトにからかわれる方で、軍事の授業では最悪な成績だった。そのためか、彼は自分を『ダメな奴』『なにもできない』などと、自分を過小評価する人柄になってしまった。
しかし、ある日を境に彼は変わっていった。
それは「彼女」に言われたことだった。

そんな彼とその仲間たち。
それと彼の恋する「彼女」
の物語。

（1）NO（前書き）

はじめまして。名ヶ共です。
へたくそな表現ですが、最後まで見ていってやってください。
それでは……どうぞ！

（1）ＮＯ

いつもと変わらない日常。
変わったといえばインターネットの発達と、技術（スキル）の発見と発展、銃刀法の改正、そしてなによりも軍のもつ権力。（軍事力はアメリカにも匹敵する。）これくらいだ。

今の日本は、ネットオンライン、通称ＮＯ。（文字が文字のためノーと呼ばれる。）
このオンラインゲームを、日本の人口約９９．９％の人がやっている。このゲームはようするに、

何でもアリなゲーム。
ＮＯの中で、車、バイク、雑貨はもちろん、銃、刀まで買える。（裏では、一般でも買えない銃などを買えるらしいが。）

さらに、ゲームも豊富。テーブルゲーム、アクションゲーム、シューティングゲーム、ＲＰＧなど、ほとんど無料でできる。

外国の人も、３人に一人がやっている。それに海外の言葉は、一瞬で自動翻訳。そのためいつでも気軽にチャットできる。

・・・で、なんで俺がこんなことを思い浮かべてるというと・・・・・

（1）NO（後書き）

初投稿なので至らぬ点はあると思いますが、楽しく読んでいただけたらいいなと思っております。作者に、感想、評価など遠慮なくどんどんよろしくお願いします。あった、なかったでは、まったく違ってきます。

ストーリーや、文章表現の評価、誤字などのご指摘、お気に入り登録など、作者はできる限り精一杯頑張っていきますので、よろしくお願いします。

（2）射撃訓練

「おい・・・ 聞いてるか？お～い！幸斗！」
幸斗と呼ばれた少年が、あわてて聞く。
「なに」
「あのな・・・ 俺らは今からＮＯでバイトすんだぜ・・・」
あきれた声でもう一人の少年は言う。
「あのさ、思ったんだけど中学のこんな重要な部屋でバイトしていいって許可もらったの？村井洋介くん？」
「もちろん！もらってないよ。大城幸斗くん？」
「疑問系で返すな！」
「まあまあ」
うまくたしなめられた幸斗が呆れた……を通り越して、諦めの顔になっていた。
「まあ、やってみたらわかるだろ」
その言葉に続いてパソコンを起動し、修繕アルバイトを仕方なくやった。
だが、表情は変わらなかった。

『お疲れ様でした。またのご協力をお待ちしております。』
このナビゲーターがいい終わると同時に、
「な、何だよこれ・・・ 半端なく難しい作業じゃん、修繕って・・・」
「言い出した洋介がへこたれてどうすんだよ。」
まあ確かに、幸斗もすごく難しいのは、作業を進めていくうちに嫌というほど感じていた。

「・・・終わったんだし、そろそろ教室戻らないといい加減ヤバイと思うけど・・・」
「あっ・・・」
その言葉は、幸斗の心にひどく響いた。
「次、軍事の授業・・・」
・・・一気に青ざめる2人
「・・・い、急げ！」

はあはあ・・・
「二人そろって授業に遅刻か。まあ何をしてたか知らんが。」
（知られてたらヤベェよ・・・）
心の中で、まったく同じ言葉を呟く2人。
そんな2人をほっといて、威厳のある教師は続けた。
「・・・えーでは、今から射撃訓練を行う。」

この国では、中学3年から公式な銃、刀の扱いを学ぶ。急激な軍事化が進んだ日本では、授業で取り入れられるようになったのである。

しかし、この授業を良く思わない1人の生徒がいた。

幸斗である。

彼は、お世辞にも、射撃が上手いとはいえない。
正直に言うと下手だ。
剣術のほうも下手ではないが、
上手くもない。
彼は自覚していたし、授業のときは笑い者にされることも覚悟していた。

けれど、

けれどいつも遠くで見ている「彼女」には笑われたことはなかった。
いつも「彼女」だけは、真剣に俺のことを見てくれていた。
名前は幸斗でも聞いたことはある。
愛島美保。それが「彼女」の名前だ。
なぜ知っているかは、彼女が、この学校で1番の
美少女、といっても、誰も疑うことなどしない。
だがそれは同時に、幸斗には届かない、「高嶺の花」ということを、
容赦なく突きつけてくる、ということだ。

だから幸斗は、

彼女だけには、笑われたくない。

その一身で、この授業に今日も参加している。
「……以上だ。これで説明と注意を終了する。今から拳銃を配るので、扱いには十分に気をつけること。・実弾、だからな。」
……これにはなかなかなれない。実弾が入っている、ということは人を傷つける力を持っているということ。
「では、はじめ。」
その冷静な言葉が放たれたあとに訓練は開始した。
「ふう・・・じゃ、やってくる。」
その言葉の主は、洋介。
彼は性格こそチャラけているが根はマジメ。
射撃の訓練は、洋介がダントツの成績。

３発の弾が放たれた後、洋介のすごさは、教師が物語っていた。
担当の教師だけでなく、他の担当の教師ですらも見入っている。

「ふう・・・」

この一言で、洋介の訓練は終わった。

「次は・・・幸斗お前だぞ？」
「いわれなくても分かってるよ」
嫌でも理解できた。
「……はい、次は……ああ、お前か大城。いつでもいいぞ。」
銃を構える。わずかだが震えていた。
この後起こることは……容易に想像できる。
覚悟は決めた。
「・・・よし」

３発・・・いや４発の発砲音は、一瞬でまわりの空気を変えた。

・・・・・・嫌な予感しかしない。

（3）爆発的な威力

嫌な予感しかしない。

直感で、そう思ったのだ。そして

「……フ、フハハハハハハハやばいってこれ！　はら！　腹痛い！　ハハハ！」

「ハハハハハハ！」

はぁ・・・まぁこうなるよな。

予想通りすぎて幸斗も言葉がでなかった。

教師もなだめるが、教師も笑っていては効果はない。

いつものことなので、幸斗は我慢する。それしか方法は無い。

悔しい。

だけど自分は何も出来ない。

変えようとは思っている。

技術（スキル）の訓練もしている。

だけど、この悔しさはやはり慣れていいものではない。

「黙れェ！！」

・・・笑いが一斉に止まった。

その声は小学生が怒鳴るような言い方だったが、今はそれを軽く受け取る者はいない。

「あんたらそれでも教師かよ？生徒が笑いものにされてんだぞ。これ、イジメともうけとれるよなぁ？」

教師たちは急に黙り込み、口を動かそうとするが言葉が出てこない。

「それにお前ら、クラスメイトが笑われてんだぞ？よく平気でいられんな？」

洋介は言う。

それは紛れもない正論だった。

「いくぞ幸斗。」

幸斗は不覚にもその姿をかっこいいと思ってしまった。

「はぁ……」

そこには先ほどとはうってかわってため息をつく洋介の姿があった。

「なんでお前がため息ついてんだよ。」

「……いやぁ、ずいぶん勝手しちゃったなぁと思って。」

幸斗は「何だそんなことか」とでもいいたそうな顔をした。

「……はぁ、なんだそれ。洋介らしくねー。」

「なっ」

「だってさ、チャイムもうなってんだぜ？終わったことなんだよ。それに本人がいいっていってんだから、いいんだよ。」

幸斗は我ながら強引だったと心の中で思った。

「あっ……あの」

えっ？
不意に後ろから声が聞こえた。
その姿は見たことがある。
「あの、大城くん、ごめんねって皆言ってるから、早く教室にかえってきてね。」
愛島だった。

どうすればいいのか迷っているうちに、愛島は教室へと戻っていった。

「あ……」

幸斗は妙に暑い顔に違和感を感じながら、その場に立ちすくんでいた。

（4）告白

「――はぁ！？　分かってたのか！？」
下足に幸斗の声が響いた。
「分からないバカがいるか？」
幸斗が頬を紅に染める。
「だけど、そんなに分かりやすかったか！？」
「わかりやすかった。だから何回もいっただろ？　わからねぇバカはいないって。てか、お前分かりやすすぎんだよ。」
幸斗は相当ショックのようだ。
「ま、分かっちゃったものは仕方ない。ほらさっさと帰ろうぜ幸斗。」
「人事だと思えばぁ～」
恨めしそうな幸斗の視線が洋介に刺さった。
いかにも居心地悪そうに、首を竦める洋介。
「・・・分かったよ。なんかおごるからさ、今度。」
洋介は仕方ない、とでも言いたそうな雰囲気で幸斗に言った。

「言ったな？」

はめられた！

そう思うときはもう遅い。

にやにやとした笑顔を浮かべた幸斗の横顔しか見えなかった。

洋介は自分のお財布を取り出して、中身を見ると、ハァァと、長く深いため息をついた。

幸斗は自宅に戻り、すぐにリビングに入った。

「あっ……お帰り、兄貴。」

そこには、活発的な少女が一人、言うまでも無く、幸斗の妹である。

世間的には、「美少女」と呼ばれてもおかしくない容姿の持ち主だった。

短髪だが、少女らしさが残っており、

その可愛げのある声に魅了されるものは後を絶たない。

幸斗も世間的には、美男子なんだろうが目の前にいる少女には到底……ではないが勝てない。

「どうしたの？　兄貴？」

「・・・いや、別になんでもないよ。」

どこか諦めたような声音で幸斗は言う。

「そう？　ならいいんだけど」

紅音は自分の目の前にあるパソコンに電源の入れながら言う。

「・・・そうだ紅音。お前宛に腐るほど手紙、届いてるぞ。」

話を逸らそうとして言った幸斗。

「ああ、それ全部捨てといて。」

だがそれはバッサリと切り捨てられた。

「あっ！？・・・ああ分かった。」

だが、この少女は「鬼」だ。人の好意を笑顔ですべて捨ててしまう。

自分の認めた人以外は、バッサバッサと切り捨てていく。

友達関係は上手くいっているみたいだが。

朝に待ち合わせ場所に急いだ少年が一人、走っている。

「・・・遅いぞ幸斗」

その声は洋介のモノだ。

「ハァ・・・すまん・・・ハァ・・・」

しばらく息を整えてから、学校へ歩き出した。

しかし、幸斗の目は、ある一人の少女によって奪われた。

「あ、愛島だ」

「ウソっ！？」

「ん？　なんか言ったか？」

幸斗は自分にしか聞こえない位の呟いたつもりだったが、洋介はなんとなく聞こえていたようで、幸斗は洋介がはっきりと自分の言ったことが聞こえていないと分かると、今度こそ誰にも聞こえないぐらいのため息を吐いた。

幸斗は彼女が近くを歩いていると、幸斗はまた妙に顔が暑くなった。そして幸斗は自分自身も驚く行動に出た。

「愛島さん！お、おはようごじゃ……」

幸斗は、自分から話しかけたのだ。

しかし、彼がした挨拶がいい感じに噛んでしまって、まわりの生徒を、残らず全員失笑へ導いたのであり、その場の幸斗は、変な緊張に包まれていた。

「きょ……今日はいい天気ですねっ！」

噛まずに言えた。が、

「今日は曇りですが……」

困惑気味の愛島が言った言葉によりまたもまわりの生徒を、失笑ではなく、腹を抱えながら押さえ殺した爆笑の渦に巻き込んだのだ。

周りの生徒はお腹を抱えながら、「アイツ振られるよな~？」などという、幸斗が聞くと大否定しそうな会話をしつつ、早足で先に行った。

「あっ！　あのっ！！」

「は……はい？」

微妙にテンションが違うのは、横に置き、

「えっと．．．その．．．」

「お、俺と、め、メアド交換しない！？」

しばらくの沈黙の後、彼女は申し訳なさそうな、そして困惑気味な笑顔をすると、幸斗に十分聞こえる声で言った。

「いいですけど……今はダメ。学校のすぐ近くだし、教師に見つかったら面倒だから。放課後、なら多分大丈夫だから。それじゃ！」

そう言い切ると、早足に学校へと行ってしまった。

（5）親友

「……おーい。ユキトォー」
「な、なに！？」

「お前・・・ず～っと今日そんな調子だもん。気になるでしょ。」
（分かってるくせに・・・）
心の中でそう呟いた。

彼が気にしていることは、もちろん

「彼女」である。（これ以外に何があるのか。）

幸斗の今日の調子は、普通を装ってはいるが、時々顔がのほーんとだらしなく緩むので、洋介はそのことを指摘したのだ。

「だけどよ、あそこは付き合ってください！　って言うトコだろ～。このヘタレめっ！」
「っ！　う、うるせぇ！」

割とマジな迫力に洋介は幸斗の言葉に本気でびびったようだ。

「えぇ！？　ごめんごめんって！？」

しかし彼の言葉は興奮した幸斗の耳には入らない。

「ようすけェェ！」

「やべぇ！！」

そこに、

「……はいそこまで！」

突如介入してきた少女により間一髪、洋介は助かったのだ。

「ふう～・・・あっぶねぇ～」

安堵の声をあげた洋介だったが、

「・・・・・・ふんっ！！」

その少女からチョップのようなものがとんできた・・・などと思っている暇は無く、

「あ痛っ！」

「制裁の鉄槌よ。」

洋介は自分の頭部に激痛が走ったと思うと、大事そうに、自分の頭をさすった。

「なっ・・・なんつー威力、そこまでする必要な・・・」

「あるよ。幸斗くんはともかく、君には手加減する必要はなし。そもそも君が原因なんでしょ？」

「なんで幸斗はいいんですか！？　それなら二人平等にするべきじゃないですか！？」

もっともな意見な洋介である。が、

「まわりの人たちの証言によると、君が幸斗くんに対する挑発的発言によりこのような騒ぎになった。

てか私自身、あんまり拘りたくなかったんだけど、朝からず～っとテンション低いって言われてる幸斗くんがいたし、私生徒会の人間だからほっとけなかったのよ。」

（（だからって暴力はぁ））

心の中で同じことを思っていることに気づくわけが無い二人だった。

「だからってそれって職権乱用じゃ・・・・・・」

「ん？　何か言った？」

「「言ってません。」」

（（怖すぎるなぁこの人。））

二人がそんなことを思っていると、

「あ、まだ名前言ってなかったよね？私は、中里呼癒〔なかざとこゆ〕よろしくね。」

ふと二人はなんでもない疑問が浮かんだ。

「なんで僕らの名前知ってるんですか？」

洋介も幸斗も同じ疑問をもっていた。

「あははは、そりゃ有名人だからね、幸斗くんは。」

ん？　・・・・・・

「幸斗くんは？　あれ？　俺は？」

「あはは、ゴメン、君も知ってるよ。だってカッコよかったもんね～前の事件。」

洋介は緊張しているみたいだ。

・・・・・・ん？　呼癒が洋介に無理やり耳元でなにか話をしている。

すると洋介の顔が真っ赤になり（その前からもともと赤かったが）、たっているのもやっと、という感じになった。なぜか呼癒の頬も赤くなった。

・・・・・・フラフラだなおい。

「なに言われた？」

・・・洋介の頭がプシューとでも、なりそうなくらいフラフラだった。

「・・・・・・すぐには聞けそうに無いな。」

そう呟くと

その場を後にした。ふと振り返ると、呼癒が恥ずかしそうに手を振っていた。

「んで、どうしたんだ。」
今は授業が終わってすぐの時間。
「えっ～とだな幸斗。」
「うん。」

「話せば長くなるんだが・・・・なんか俺ってさ、幸斗の事件のことがあってさ、急に人気沸騰中らしいんだ。
それでそれ自体は嬉しかったんだ。ほ、ほらなんだかんだいって男ってモテんの嬉しいじゃん？」

なんという女たらし発言。その他諸々突っ込みたくなるところはいろいろあったが、モテるのはコイツの場合納得した。
コイツの場合俺から見ても、なかなかの美少年。しかも（表面は）人当たりが良い。

「・・・・・・それで？」

「そう！　これからなんだよ！」
「まぁまぁ落ち着いて。」
危ない危ない。妙に声でけぇんだよ。

「・・・・・・すまん。・・・・・・・で、それ聞いたときもめちゃくちゃどきどきしたんだよ。なんか中里？がものすごく近いからさ。ほ、ほら、中里ってさ、なんか、その・・・・・・め、滅茶苦茶かわいいじゃん？あのセミロングの髪でちょっと茶髪で声むっちゃ可愛くて、すんごい良い匂いがして・・・・・・・・・ってこんな話じゃなくて、とにかく、なんか俺理性崩壊直前だったんだよ。」
たしかにあれだけの美少女（幸斗は愛島程ではないと思っているが）にあれだけの大胆行動をやられたら、誰だって、洋介みたいになる。

「それで？」
幸斗は持ってきていたペットボトルのお茶を飲みかけながら問う。

「んで、急に俺に・・・・・・・・・『キミも頑張りなよ！』っていわれて・・・・・・」

ブハァ！！

「き、汚ねぇ！！　きたないぞ幸斗！　ちょっとだけど俺に飛んだぞ！」

「す、すまんすまん。」

本当は少しも悪いと思っていないが、そんな感情は吹き飛んだ。

「て、てめぇそんだけ！？　結構純心なんだな、それどうよ！？」

「おぉお静かに。」

「あ、ああごめん。」

「んですんごい困ってんだけど、どうすればいいかなぁ？」

幼稚園の時からモテ続けていることは目を瞑る。

幸斗の中ではすでに答えは出ていた。

「知らん。頑張れ」

落ち着き過ぎとも取れる、冷たい声で洋介に言った。

余りにも素っ気ない返答に逆にびっくりしたのか、洋介は、そりゃそうだ、とでもいいたそうな笑顔になると、幸斗に話しかけた。

「話付き合ってくれてありがとな。」
幸斗は驚いた顔になった。が、
「なんか親友みたいだな。」

「ちがう。俺たちもう、親友だろ？」
その言葉に幸斗は、嬉しそうな顔だった。

「・・・そうだな。」

「・・・・・・・・所で、時間、大丈夫か？」
ふとまわりを見るとクラスメイトは洋介以外、誰もいなくなっていた。
「・・・ちょいやばいかも。」
幸斗は苦笑した。
「言って来い。」
しかしすぐに親友に後押しされ、
「・・・・・・言ってくる。」
そう呟くようにいうと
洋介は笑顔のまま見送ってくれた。

（5）親友（後書き）

読者様からの一言、評価、マイリスト登録など、作者のやる気を引き立てるようなことがあれば、作者はすごく頑張ります！
応援よろしくお願いします！

（6）メールアドレス

「はぁはぁ・・・・・・・・・・・・・ちょっと長く話しすぎたかな？」

幸斗はある教室の前にやってきた。もちろん、愛島美保の教室にである。

先に怒って帰ってしまっているかな、などと心配する幸斗であったが教室に入ると、そんな考えは無くなった。

窓を開け、肘を付きながら空をボンヤリと眺めている少女。

恐ろしいほど絵になっており幸斗は数秒間みとれてしまっていた。

はっと気づくと、その少女はまだ空を眺めている。そういえばもうあたりは夕焼けごろだ。そんな状況をベタだなぁと思っているのは幸斗の心の中だけである。

「・・・・・・・・・・・・・あの、愛島さん？」

ビクッと体は一瞬震わせると、恐る恐るこちらを向いた。

「・・・・・・・・・・・そんなに俺が怖い？」

「違う、誰かと思っただけ」

そう言うと、俺に向かって少し笑った。

「それじゃ、早くすませちゃお」

「う、うん」

彼女が携帯を取り出すと、幸斗もそれを見習い、携帯を取り出した。そこで幸斗は、、ふとした疑問が浮かんだ。

「……うちって携帯って良かったけ？」

「だめだよ？」

何気なしに彼女が言うと、幸斗は、ん？と顔を捻った。

「え？　じゃあダメなんじゃ……」

「あなたも持ってきてるのに、遅いと思うよ？」

ああ、そうか。と一人得体の知れない納得をし、普通にメアド交換を終了した。

「それじゃ、私帰るね、ありがと」

「えっ？　あぁ……」

情けない声で幸斗は言ったが、幸運にもそれが彼女に聞こえることはなかった。

はぁ、とため息をつくと、幸斗は一人、こう呟いた。

「俺も帰るか」

しばらく携帯の画面を見て上気分の幸斗だった。

（6）メールアドレス（後書き）

読者様からの一言、評価、マイリスト登録など、作者のやる気を引き立てるようなことがあれば、作者はすごく頑張ります！
応援よろしくお願いします！

（7）二丁の銃（前書き）

一回全部書き直しました。
はい、盆ミスです。
バックアップとっときゃよかった（泣）

はぁ……

（7）二丁の銃

俺は今、自宅の前にいる。

「ただいまァ～」

そう言いながらリビングに入る。

「あっ、お帰り、兄貴」

「なぁ」

「ん？」

「なぁ、ちょい相談乗ってほしいんだけど。」

「いいけど」

幸斗は決心したように、紅音に言った。
「……銃？　いいんだけど、急になんで？」
まぁ、聞いてくることは予想していた。

「なんというか、諦めずにやってみようかな、って思っただけ」
「……へぇ？」
意味ありげな「へぇ」だったが、幸斗はあえて気づいていない振りをした。
それに少しビクッとした幸斗だった。

「で、正規のヤツで買うとダメなんだよね。」
ん？

「ちょっと待て。何でダメなんだ？」
分かりきったように紅音が答える。
「だって本当にいいものなんて絶対って言っていいほどない。やっぱあるとすれば裏ルートだね。……だけどほんとに実際に行ったら危なすぎるからＮＯかな。」
それも危ないんじゃないか？……ということも頭に巡ったが、そんな心配はひとつも要らない。

彼女はコンピューターの……天才だ。

彼女によって家のセキュリティはもちろん、彼女の部屋を見れば、誰が見てもすごいと感嘆するだろう。

その機械は紅音により作られたが、それは最先端の研究所、軍事基地に匹敵する。

紅音が本気を出せば最先端のコンピューター技術がいくら束になっても紅音なら捻り潰すだろう。

それだけ紅音はすごいのだ。

「兄貴、じゃ、善は急げってね。やるよ。」

「ぜ、善？　まいいやうん。」

『ｎｅｔ　Ｏｎｌｉｎｅ　へようこそ』

そのナビゲーターがいい終わり、その他細かなことが終わると、

壮大すぎるフィールドへ繰り出した。

そしてしばらくすると、町が見えてくる。その町はあまり治安がよくない所だ。

その中でもひときわ目立つ建物の中に入っていった。

入った瞬間画面が真っ黒になった。

「ここだよ、裏のＮＯ。」

すると画面には、剣、刀、日本刀、拳銃、サブマシンガン、アサルトライフル、機関銃、ロケットランチャー、装甲車、軍事車両、重武装軍事車両、戦車、戦闘ヘリ、輸送ヘリ、戦闘機、ステルス爆撃機、戦闘用潜水艦、巨大戦艦などなど表では売れないようなものがズラリと肩を並べている。

「この中から私が選んだげるね」

またも幸斗に破壊的な笑顔が放たれた。

「……これ、いつまでやんの？」

紅音が選び出してから軽く3時間が超えていた。

時々、怪しいモノも出てきた。が、紅音がイラッとしたのを確認するとものすごいスピードでキーボードを打つ。それが終わったら非

常に清清しい顔でまた選ぶのに戻る。
ちなみに相手はご愁傷様としか言いようが無い。

急に紅音のスクロールする音が止まった。
すると

「……兄貴、これ見て。すごいよ。」

画面には、二丁の銃が表示されていた。

1丁は銀色に輝く、リボルバータイプの銃。

1丁は黒にすこし銀が入り、こちらもリボルバータイプの銃。

「……これ、すごすぎる。これ、存在自体が幻だよ。こんなの見たこと無い。」

な、なんつー銃だよ。

「これ、超国家機密の銃だよ。……あぁ、なるほどね。」

一人で意味ありげな笑みをこぼした。

てかそんなの……いいのか？おれに。

「これがいいと思うよ、兄貴」

「うん、いいよ。」

即答したのは言うまでも無い。

そういえば……

「販売者は？」

すると紅音は

「後ちょっとでしっぽつかめたのに……その話はしないで。」

心底残念だったようだ。

「ご、ごめん。」

それよりも、

「お金は……二千円？」

は？

「そうだよ。」

はァァァァァァァァァァァ！？！？

「安っ！　えっ、そんなんで大丈夫！？」

「裏ルートの武器なんだから、どんなのがあってもおかしくないよ」

中学2年の女子が言う言葉ではない。

「じゃ、明日の夜届くように注文しといたから。」

その夜、紅音の気分が最高によかったのは言うまでも無い。

（7）二丁の銃（後書き）

今回は明るく書いてみました。（作者の気分はどん底です。）
今回は主人公のキーアイテムがひとつ出てきました。
さあ、これからですよォ！

作者に、感想、評価など遠慮なくどんどんよろしくお願いします。
あった、なかったでは、まったく違ってきます。
ストーリーや、文章表現の評価、誤字などのご指摘、お気に入り登録など、作者はできる限り精一杯頑張っていきますので、よろしくお願いします。

（8）じゅ…け……ん（前書き）

展開速すぎるのは自覚してるんですけどねぇ……
まあ頑張りますよ。
そして今回もまたやり直し！

皆様、貴重なご意見やアドバイス、本当にありがとうございます。

あと、この物語はフィクションです。
　この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

（8）じゅ…け……ん

「……おはよう。」

「うおう！？なんだよ。めっちゃ暗いぞ幸斗。」

いやそんなことは無いんだが。

「そんなことないよ。逆に洋介テンション高いよ。高すぎるよ。高すぎてついていけないよ～。」

「言うな言うな！　バカにすんな。てかこれが俺のキャラだろ？」

そういうのは自分で言わないものだと思うんだが。

「それよりさ～最近物騒だよなー。だって戦争起こりそうじゃん。」

おっさんかよ！……と思ったがあながち間違ってはいない。

一月前に日本の大臣の殺人事件があった。警察も捜査をしていたようだが手がかりは一切無し。そうして時間が過ぎてゆく間も立て続けに起こる。

しかしその死も無駄ではなかった。警察がついに居場所を特定し、そして犯人達を車に乗り込もうとするときに身柄を確保した。

しかしその際、激しい銃撃戦が起こった。そのため死傷者が数人に上った。犯人達は一人の例外もなく、全員が負傷していた。しかし、全員が生きていた。
だが、その犯人達の素性を調べると、とんでもないことが分かった。
彼等は、中国の諜報員であることがわかったのだ。
それがきっかけで戦争が起こりそうになっている。
あくまで『起こりそう』だ。
そうならないのは、もう一つ理由がある。

千島列島がロシアに奪還されたのである。
2年前、『千島戦争』があった。
その戦争は日本は劣勢で、その時点では誰がみても負けると予想するだろう。
政府も諦めていた。

しかし、一人の少年兵により、その戦況は激変をした。
その少年兵は、威力の高い正体不明の銃を使い、敵拠点を一個小隊とともに制圧していった。

そのため、諦めていた政府も、戦場で戦っている兵士も、皆最強だと彼を称えた。
最後の制圧拠点。これも彼率いる日本軍が制圧にかかったようだ。
しかし彼は、最後の最後で、敵に打ち抜かれ戦死した。
不思議なことに、彼については一切不明で、その銃だけが政府に回収されたそうだ。

しかし、今回は、国内に政府は手一杯だったので千島列島防衛に手が回らなかった。
おかげで周辺の軍基地は全滅、完璧にロシアの手中に落ちた。
戦争に全兵力を投入すると、ロシア軍が確実に本島に侵入する。
逆にすると中国に侵入されこちらのほうがかなり悲惨になる。

つまり今の日本は、本当にぎりぎりの状態である。

「……幸斗？おい」

考え込みすぎて心配を掛けていたようだ。

「いや、大丈夫。」

「そうか？」

学校へ着くと、いつも通り上履きに履き替え、ただ疲れるだけの

階段を上り、教室の自分の席に座る。

やがて授業が始まると、いつも以上にマジメに授業を聞く。

俺はなんもかんも普通。ちっとチビなのはほっといて、勉強もできないわけではないが、できる訳でもない。

……周囲の視線が痛い。何？マジメに授業聞いたら駄目ですか？

そんな調子で授業を聞いていく。

そして昼休み。迷うことなく購買へと足を進める。

つくとそこも生徒で賑わっている。

校売で特に好きな物は無いが、美味しかったものはたまに何個か買って家に持って帰る。そういう事をするのも好きだ。

きょうは～どっれに～しようっかな～♪

……コホンコホン。

えっと…これでいいや。

「今日は焼きそばパンね。」
おばちゃんがそんな事を言っている内にお金を払い、パンを受け取った。

「遅かったな、幸斗。」
「悪い悪い。」
挨拶程度の会話をすると、昼食タイムが始まる。
「あのさ、洋介、みんなさぁ、銃って持ってるもんなの？」
やっぱりこれは気になった。話のネタにもなると思うし。
「ん？ああ、多分みんな持ってる。前の事件の影響で、犯罪が増えたらしいからな。まあ、ほぼ護身用だろ。だけどま、根っから趣味で集めてたりする奴は多いけどな。」
「なぁ、俺の、見せてほしい？」
ちょっと面白半分に話を振ってみた。
「お前って持ってたっけ？」

「今日届く予定。」

少し自慢げに話した。どうだ！！

「じゃーこんどみにいくなー」

「おまっ、棒読みはねぇだろ！」

午後の授業もマジメにやった。てかよく考えれば俺中3で、受験か～……受験、大丈夫かな。いやまあ今からやればいいか。……あの高校、超難関じゃなかったけ。……ま、いいか。

（8）じゅ…け……ん（後書き）

ま、いいかですめばいいんですけどね（笑）

あと本当にほんっとうに感想ありがとうございます！ちょーためになります！

なんか今まで思い上がっていた気がします。本当にありがとうございます。

作者に、感想、評価など遠慮なくどんどんよろしくお願いします。
あった、なかったでは、まったく違ってきます。
ストーリーや、文章表現の評価、誤字などのご指摘、お気に入り登録など、作者はできる限り精一杯頑張っていきますので、よろしくお願いします。

（9）模擬戦大会！

「ただいま～」

俺はいつもとかわらずフツーに帰ってきた。
そしてフツーにリビングに入る。

「……ただいま？」

……返事が無い。でも電気はついてる。テレビもついてる。
……ということは…

「うぅ……」

やっぱり。

「どうしたんだ？　紅音？」
「分かってるくせに聞かないでよ。」

ソファで苦しそうに寝ている。

「やっぱ運動系は、休めばよかった……イテテ…」

コイツは体力がない。すぐバテる。コンピューターには強いのに、
体を動かすとなるとすぐこれだ。スポーツとかは向いてない。

「で、どうやって帰ってきた？」

「友達に送ってもらった。」

紅音の友達……ご愁傷様。

「あ、アレ届いてたよ。でもすぐ解けそうに無い。」

ん？　どういう意味だ？

「最先端プログラムがインストールされてる。だから、すぐに解けそうに無い。」

なんでそんな事する必要が……

「ま、気ままにまってて。……イテテ……」

ん、まあ…うん。

翌日……

「はいでは～みんな知ってると思うけど、一ヶ月後に模擬戦大会やります。」

今はＨＲ。そして担任の声が教室いっぱいに響く。
「受験勉強もいいけど、そればっかりやってると息詰まるでしょ？」
……ああ、もうそんな時期か。
「めんどくさいからさっさと説明するけど、
まず、ルールは、敵陣営を占領、もしくは無力化すれば勝利。
こっちからいろいろ事前に、いろいろ置いてるから勝手に使ってくれて結構よ。
旧市街地一帯を使うから派手にドンパチやってくれて結構。ただし、殺傷弾および殺傷武器の使用は禁止。使用した場合、コイツを使ってこっちから無力化する。」
見せられたのはブレスレット。最先端プログラムが施されている以外は、特に変わったところは無い。
「続きいうわよ。
……で、コイツから電流流して気絶させる。で、その殺傷武器使った奴は……言わなくても分かるよね？　あ、あと、ブレスレットは外さないでね。
……で、使っていい弾薬は、こっちから渡す模擬弾だけ。模擬弾っていっても、あたったらすごくしんどいから、基本、あたっちゃダメ。
近接武器も、殺傷性が無かったら、使っていいよ。
チームはこっちで勝手にクジで分けてるから、後で言うね。
あと他の学校も来るから負けちゃダメだよ。
これくらいかな。」

うん、まあ分かったけど。

「なあ、幸斗、俺模擬戦大会なんかすっかり忘れてた。」

「俺もだよ。」

……模擬戦大会。今年は頑張るぞー。

「なにニッコリしてんだ？」

「い、いやなんでもないよ……ってえ？」

「あ、ごめんなさい。……あ、」

そこには愛島が立っていた。……しかも廊下でばったり。隣に中里。

「あ、村井君、この前はありがとね。」

「いや……別に。」

なに照れてんだよ洋介。つーか他でやれ。

「え、え～と、じゃあね、愛島さん。」

俺のバカ！　アホ！　マヌケ！　何でこのままかえんだよ！

「う、うん。」

ぜってー顔赤いよ俺。自分でも分かる。なんか恥ずかしい。

「よ、洋介行くぞ。」

「お、おう」

「幸斗、さっきの何だ？」

愛島たちと分かれた後、不意に洋介が訊ねてきた。

「え？　別に普通……」

「じゃねぇだろ！？付き合ってるくせにアレだけか？」

洋介の言葉を聞くと見る見るうちに、顔が真っ赤になっていった。

「べっ別に付き合ってねえよ！……友達だよ。」

「は？」

「うっせーな！さっさと教室戻るぞぉ！」

その後特に変わったことは無く、授業を聞いて帰宅した。

「んで、解除に成功したと。そういうわけだな？」

帰宅すると、昨日とは違う意味でソファでぐったりしている、紅音がいた。

「だからそうだって。早くあけてみたら？　あ、後でみしてね。」

「あ、ああ。」

そういうと、リビングを出て、自分の部屋へ向かった。

「ん～……ま、開けてみますか。」

そう呟いてロック解除された箱を操作し、蓋を開ける。

中からは、あの時見た画像より光沢のある2丁の拳銃と、１００００と表示された画面とその横に見たことも無い大口径の弾丸があった。

（9）模擬戦大会！（後書き）

う～ん。やっぱり難しいです。

こう自分がド素人な書き方してると、他の作者様方がすごいと思いますね。

（１０）チームメイト（前書き）

前確認したところ、ユニークユーザのほうが、１３０人と表示されていてびっくりしました！
こんなダメダメな文章を読んでくださっている方がいると考えると感激です！！
あと更新が遅くなりました。申し訳ありませんでした。
これからも頑張っていきますのでよろしくお願いしますっ！

（10）チームメイト

「……なんだこれ」

口から出た第一声はこれだった。

それもそうだろう。あけてみれば自分が持つのに不相応なぐらいの立派な『モノ』が出てきた。それに、本体よりも気になった大きな弾丸。普通の拳銃ならばこんな弾丸は絶対に使わないだろう。……使えないといったほうがいいだろうか。

しかしこの弾丸、リボルバーにピタリと装着できた。

それに少し窪みがあった（弾丸が置いてあった場所）に弾丸がまた現れていた。

……転移装置か？　だけどアレはテレビで一週間前ぐらいに発表されて最新技術だって放送されてたぞ。

そんなことを考えていると、画面が１００００から９９９９に変化していることに気がついた。

それを見た途端、確信する。

……絶対転移装置だ。それも弾丸専用の空間が備え付けられてる。

「これってどう対処したらいいのかな～。つーか喜ぶべき？　……まあいいや。」

呟くように独り言を言い終えたあと、リビングにもどっていった。

次の日の朝、いつもの様に洋介と学校に登校した。

学校に着いたのはいいが、皆いつもとちがい、そわそわしていた。

「今日チームメンバー発表されるもんな～みんなそわそわしてら。」

あ～、そういうことね。

一人で納得し、教室に入る。

しばらくクラスメイトと雑談し、過ごした。他の方向から、俺となりたくないって声が聞こえたけど無視する。

チャイムが鳴り、みんな席に座り、担任がくるのを今か今かと待っていた。

担任が教室に入ってくると、紙を配り始めた。

「今配った紙がチームメンバーです。AとかBって書いてあるのが自分のチームだから。じゃ、午前中の時間は全部あげるから、その間に顔合わせとか必要なことやっときなさい。以上。」

そういい、担任が教室を出て行った。今思ったが、結構いい加減な担任だな。

それと同時に、三年生全員が教室から移動した。

最初は俺も合流しようと思った。だが、よく考えたら重大な問題があった。

……チームメンバー誰も知らねぇ。

皆どうやって連絡を取っているのか気になった。

そこに洋介が話しかけてきた。何やってんだ、とでもいいたそうな顔で。

「幸斗何してんだ？　つったてても何もならねぇぞ。」
「いやわかってるけどさ、どうやって――」

そういいかけると、不意に携帯が鳴った。

「……お前、ちゃんとあの紙、読んでなかったろ？」
え～っと……
「……うん。読んでませんでした。」
「はぁ……幸斗、学校専用にメールアドレス登録してるだろ？」
それは入学と同時にしなければいけない手続きだ。
「で、ありゃ絶対登録しねぇとダメだから話進めるぞ。」
こちらが答えるのを無視して洋介は話を進める。
「で、さっきの紙に、チームメンバーのメールアドレスがかいてある。……もう分かるよな。」
「なるほど。その紙をみて相手にメール送って、合流するって事か。」
「そ。幸斗さっき携帯なってたろ？　ありゃ多分チームメンバーからだ。」
そこで幸斗はふと思った。
「そんな簡単にメールアドレス公開しても大丈夫なのか？」
そう洋介に問いかけると洋介は呆れた顔をして言葉を言い放った。
「あのなぁ……学校側は連絡取れればいいんだから、メールアドレス変えるのも申請すればいくらでも変えれるんだぜ？　忘れたのか？」
これぐらい当然、というような顔をされてすっかり忘れていた幸

斗は慌てて話を逸らす。
「お、教えてくれてありがとな！！　んじゃ！」
「お、おい！……ったく。」
逃げるように幸斗が立ち去ったあとにいるのは洋介。口調は呆れているが、その顔はどことなく嬉しそうだった。

教室から逃げるように立ち去った幸斗は、携帯を見ていた。
「えっと、『チームＦ－２０の人はＦ組の教室へ集合して下さい。』……か。んじゃ、行きますかね。」
そういいながら目的地へと赴く。

「……あの。」

教室に着いた幸斗は、美少女にガン見されていた。

髪の色は少し赤が入った茶色で髪は後ろで一束にされている。ポニーテールというものだろう。瞳は黒っぽい茶色で、少し大人っぽい整っている顔立ちだ。ちなみに身長が自分より少し低いので、小さい子だと幸斗は思っているが、自分の身長がかなり伸びていることに気がついていない。

しかし、制服が見たことが無かった。

「……なんだ？」

「そんなにガン見されると困るんですけど。」

当然、幸斗はかなり困惑していた。

「なんだ、私に見られるのは嫌か？」

「いや別に嫌じゃないけど……」

答えるのに困る質問である。しかし、他人にガン見されるなど、気持ちのいいものではない。

「なら、別にいいじゃないか。……よいしょっと……」

不意に彼女が座っている場所を立った。

「う……」

彼女がそう言うと、フラフラと危なっかしい足取りになった。おそらく立ち眩みでもしたのだろう。だが、バランスをとれず、後ろに倒れそうになった。

――”倒れそう”になった。

幸斗は気づかぬ内に、彼女を抱きかかえていた。

「……すまぬな。」

顔が近い！！

他の人から見ればものすごい誤解を招く体勢である。

「ごめ～ん、呼んどいて・・・お・・・・・・く・・・れ・・・・・・た・・・・・・・・・・・・」

……ヤバイ。

「お、お邪魔しました～」

「……し、しました～」

……ん？　今二人いたよな。

「ちょいちょいちょいちょい！！　まて！誤解だって！　君も誤解といてよ！！」

「私は悪い気はしなかったがな。」

悪戯っぽい笑みを浮かべると、そのまま離そうとしてくれない。

「ちょ、おい！」

誤解だと気づいた2人は、その場で苦笑した。

（10）チームメイト（後書き）

あの、気になったんですが、ＰＶとか皆さん言ってらっしゃいますけど、どうやって確認するんですか？
あ、なんかすいません。

作者に、感想、評価など遠慮なくどんどんよろしくお願いします。
あった、なかったでは、まったく違ってきます。
ストーリーや、文章表現の評価、誤字などのご指摘、お気に入り登録など、作者はできる限り精一杯頑張っていきますので、よろしくお願いします。

（11）戦闘（前書き）

厨二病くさいところがあります。苦手な方はご注意ください。

（11）戦闘

誤解を解き、落ち着いたあと一人の少年が喋り始めた。

「えっと、さっきは誤解してごめんね、僕の名前は支堂亘（しどうわたる）よろしくね。」

そう言ってお辞儀をしてきた。恐ろしく様になっていて、こちらもお辞儀をしてしまうほどだ。

彼は恐ろしいほどの爽やか美少年だ。その笑みの餌食になった女子生徒は、数え切れないだろう。

そしてそれを上回る数の男子生徒に恨まれているだろう。

ふと幸斗は思った。

自分のまわりには美少年やら美少女が多すぎないか？　と。

そんなことを考えていると、もう一人の少女が話しかけてきた。

「私は長据由香里（ながすえゆかり）。よろしく。」

彼女の容姿は、『綺麗』だ。

髪は茶色で、背中の上辺り間で伸ばし、一切の乱れなく、整って

いる。由香里がかなり大事に手入れしている証拠だろう。

ただなんとなく第一印象が、無愛想な感じがした。ただ嫌な雰囲気ではないので、ただ単に無口なのか、恥ずかしいだけなのだろう。

「ふん、相変わらず無愛想だな。そんなに整いすぎている容姿をしているくせに、もったいない。」

制服が違う少女が言う。

「べ、別に無愛想じゃないですよ。ただ私は、その……と、とにかく、なぜこんなところにいるんですか！　霧上（きりじょう）さん！」

「えっと、話が見えてこないんだけど、つかなんで敬語？」

「そうだった。自己紹介がまだだったな、私は霧上龍華（きりじょうりゅうか）。国立軍事専門第一高等学校で、副風紀委員長をやっているただの高校生だ。よろしくな。」

一瞬思考が停止した。そして少し考えてから捻り出した疑問を口にした。

「えっと、第一高校の副風紀委員長で霧上さん？」

「うむ。」

「ていうか、なにがただの高校生ですか。日本中にその名を轟かせておいてよく言いますよ。」

由香里の言うとおりだ。

幸斗がめざしている高校、それが『国立軍事専門第一高等学校』である。

この高校はその入学の難しさ、最新施設、そしてもっとも多くの優秀な軍事官を輩出していることで知られている。

そして目の前にいる人物は、二年前の千島戦争の最前線に立ち生還、一年生にして副風紀委員長に就任し、全国に名を轟かす実力者。

すでに生きる伝説として称えられている、人物。

「な、なんでこんなトコにいるんですか！？　つーか今さっきすっげぇ失礼なことしたよな！　俺！」

「失礼なことをしたって、私は何者だ？」

至極当然の疑問である。

「「「生きる伝説。」」」

が、揃って同じ事を絶妙なタイミングでいう三人。

「な、いや私はだな……もういい。」

「で、なんでこんなとこにいるんですか？」

ここにいる皆が思っていることを口にする亘。

「えぇとだな、今年の中学校の模擬戦大会で、面白そうな……じゃ

なくて、歯ごたえ……じゃなくて、有望な奴を見つけるために、サボって……じゃなくて、抜け出して……じゃなくて、学校から来たのだ。ちなみに、ここは私がでた中学校だからここに来た。」

この人は嘘が下手だと、すぐに分かる一言である。

「授業サボって何してるんですか、仮にも風紀委員なんでしょう？」

由香里の的確な指摘で観念したのか、開き直った雰囲気になった。

「フ、いざとなれば、副委員長の権限で隠蔽してやる。」

「委員長がいるんじゃないんですか？」

由香里の指摘に、不敵な笑みを浮かべると

「今の委員長なぞお飾りだ。私の足元にも及ばん。ちょっと脅してやれば……ゴホン、言い寄ってやれば一発だ。」

いろいろ終わってんな、いまの風紀委員会。と、幸斗は思うのであった。

「で、お前たちの実力が見たい。練習試合をしないか？」

話がひと段落ついたところで、龍華が提案した。

「いいですけど、私たちなんて敵じゃないんじゃ……」

当然のことだ。

生きる伝説といわれるほどだ、足元にも及ばないだろう。

「手加減するに決まっているじゃないか、それと、午前中時間はあるのだろう？　どこか一つぐらい体育館が空いているだろう。」

その答えに渋々頷く三人だった。

「さて、好きな武器を選べ。訓練用に、大量においてあるだろう。あ、あと、いくつ技術（スキル）を設定してもかまわん。万全でこい。」

技術(スキル)とは、いわゆる自分の技だ。
ある科学者が、脳の新しい機能部分を発見した。
その部分は、今まで一部除き誰一人として使ったことのない部位で、一種の大発見だった。
その部位を科学者は、幻脳、と名づけた。

そして幻脳利用して、科学者たちは、魔法のような新しい技術を開発した。

それが、『技術(スキル)』である。

これは、人工的に覚えれる技術(スキル)もあれば、その人だけしか使えない、もしくは、その人が努力して使えるような技術(スキル)もある。

しかし、なぜ設定しないといけないのかは、その人の幻脳によって、使える技術(スキル)が限られるからだ。
もし、その人の許容量を超えれば、幻脳が麻痺し、一生(スキル)技術が使えなくなったり、最悪脳全体の機能が停止し、死亡することもある。
技術(スキル)を使うには、そんなに苦労はしない。
しかしそれはあくまで一般レベル。
努力しないと大した物は使えない。しかも、才能にも左右される。

つまりはその人次第で、どうにもなるのが『技術(スキル)』なのだ。

「決まったか、それでは用意はいいな？」
三人に対して問いかける。
「「「はい！！」」」
「では……始め！！」

その龍華の声でこの『戦闘』が、始まった。

（11）戦闘（後書き）

お待たせいたしました。
そしてすみません。

脳がなんちゃらかんちゃらしてるトコは完全オリジナルです。
今思うと、自分には才能ないかもです。主にネーミングセンス。

（12）半覚醒（前書き）

自分はサブタイトルつけるのに、結構時間かかります。
なんかめっちゃ悩みません？

え？　誰も聞いてないって？

あ、ハイそうでした……すいません。

（12）半覚醒

「技術（スキル）展開っ！　【高速移動！】」

最初に動いたのは亘だった。
彼の右手には短剣、左手には切り詰めたショットガン。
そして高速移動の技術を展開。
ちなみに技術（スキル）は言わないと発動できない……訳ではないが、そのほうが発動しやすいのだ。
そして技術を使うと、光る陣が浮かび上がってくるが、これは使用者の精神力が目に見えているだけだ。

高速移動は、基本技術にして数多くの活躍をしてきた技術でもある。

そして確実に龍華に近づいていく。
使い慣れているのだろう、その動きは無駄がない。

龍華の両手には片刃の剣、つまりは刀が二刀、握られていた。

亘が短剣を持っている方の腕を振り落とした。
しかし龍華はニヤリと笑い、片方の刀で簡単そうに防ぎ、

「この程度か？」

そう言った。

すると今度は龍華が首筋を狙い、刀を振る。

「っく、させるか！」

幸斗の声が聞こえた瞬間、銃の発砲音が響いた。

その弾丸は龍華の振った刀に命中し、刀が狙っていた所から外れる。

その瞬間、亘が見事なバックステップで龍華から距離を取る。

「技術無しで当ててくるか……それほどの腕があるのなら、大会などで有名だろうに。」

「いや、最近出来るようになったんですよ、霧上さん。」

「そうか……」

幸斗が苦笑いして返す。

彼の使っている銃はリボルバー式拳銃を二丁。理由は少しでも自分の持つ『拳銃』を使いこなせるようになるためだ。

この幸斗の技は毎日毎日射撃訓練場で、いつもいつも訓練していた賜物だ。

だがその代償として、剣などは疎かになったが。

しかし、接近戦闘に手を抜いていたわけではない。

「技術展開、【高速移動】」

龍華がそう言った後、幸斗の背後に立った。

「背中がガら空きだぞ？」

「なっ！？」

速い、そしてレベルが違う……

それが亘の感想だった。

「ちょっと？　私を置いてけぼりにしないで下さい」

言葉の後、多数の弾丸が銃口から飛び出す。

彼女の武器はサブマシンガンを一丁、それだけだ。

「技術展開、【操弾射撃】」

すると、打ち出された弾丸が様々な方向から龍華を襲った。

「……二重展開、【高速移動】、【一点刺突】」

龍華がそういうと、風の如き速さで移動し、【一点刺突】で、進むために最低限の弾丸を叩き落し、幸斗の前に立った。

「二重展開ってアリですか？」
「誰も禁止とは言っていまい。」

冗談げに会話する龍華と幸斗。

「さて、私の舞（まい）、持ちこたえられるか？」
そういうと龍華は二刀の刀を流れるように振る。
しかしそれは、洗練され尽くした自然な動きで、しかしどこかその双撃には強靭な力がある。正に、『舞』に相応しかった。

そして幸斗はその双撃に当た――――――

らなかった。

幸斗はその双撃を銃のグリップ部分で防いでいた。

「この攻撃を防ぐとは……少し驚いたぞ。」
「……お褒め頂き光栄です。」

しかしすぐに龍華は不敵な笑みに表情を変えた。

「まだまだ、この『舞』はこれからだぞ。」
「へ……？」
幸斗がマヌケな顔をするとすぐに
「おわっ！？」
双刀が襲ってきた。
幸斗は避けたり、先ほどの防御方法などで攻撃を防いでいたが、そろそろ限界だ。
「……ハッ！」
おそらくその舞の最後の一撃と思われる一撃が幸斗を襲った。
「させるかっ！　……うっ！？」
亘が飛び出してきた。おそらく幸斗の限界を悟ったのだろう。
しかし、亘が全力をもって防御した短剣とショットガンはすぐに亘の正面からずれ、体の上半身のど真ん中に直撃し……鈍い音を立て吹っ飛んだ。
その亘を見てみると、隣に転がっている武器『だったモノ』は使用不可能なほどに変形し、ただの鉄の塊になってしまった。
亘自身は気絶し、戦闘不能になってしまった。
「……なんです、今の？」
焦りが混じった声で幸斗が聞く。
「今までお前が受けていた攻撃だが？」

あっさり答えた龍華を見て、

（俺、あんな攻撃受けてたんだ。）

こんなことを思う幸斗だった。

「さて、そろそろ行くぞ。……技術展開、【高速移動】」

そういうと、由香里の前に立つ。

「くっ！」

由香里も必死に抵抗するが、龍華が刀を振り下ろすと一瞬で床に沈む。

「なっ！？」

龍華が高速移動で幸斗の前に立つ。

そして刀を振り下ろす――――――が、幸斗は一発の弾丸を打ち出し、刀の軌道を逸らす。

「お前、やるな。」

龍華がそういうと、急に雰囲気が変わった。
その雰囲気は今までの戦闘とは程遠く、その構えは酷く美しく、
そして同時に恐い。

「霧上龍華……参る。」

落ち着いた声でそういうと、幸斗に一撃を放つ。

しかし幸斗も、無意識に自分に纏う雰囲気を切り替えていた。

幸斗はその一撃に素早く四発の弾丸を当て、威力を多少抑えたと

ころを銃本体で刀身を受け止める。
受け止めた後、すぐに龍華に蹴りを放つ。
しかし蹴りを放ってすぐに逃がすわけも無く、弾丸を交えながら少し荒い攻撃をする。
龍華はすべての攻撃を受けている。
しかし途中で『カチッ』という音が鳴る。

途端、龍華が高速……いや、光速で斬撃を放つ。

「弾切れだぞ？　幸斗くん？」

そう龍華が言うと、ドサッと倒れる音が恐ろしく静かな体育館に響いた。

（12）半覚醒（後書き）

頑張りました。むっちゃ頑張りました！
あと疲れたです……

そして幸斗くんの強さ（？）が垣間見える瞬間でした。

（13）保健室にて。～変な意味じゃないよ！？ホントだよ！？～（前書き）

はい、超展開ですね、ハイ。

では、お楽しみください、どうぞ！！

……後悔はしてません。

（13）保健室にて。～変な意味じゃないよ！？ホントだよ！？～

どこだ？　ここ。

そう思いながら幸斗は目覚める。

今時分が寝ているところは、ベッドだとすぐに分かり、同時に天井から保健室だというのも分かる。

「ん、目が覚めたか。どうだ？　気分は」

隣から話しかけられる。口調や声からすぐに龍華だと分かった。

しかし龍華の側に何も無い事から、ずっと自分を見ていたのだろう。そう考えるとかなり恥ずかしくなり、顔が赤くなっているのが自分でも分かる。

「えっと……すんごい頭クラクラしてます……」

「そうか…すまないことをした。」

しかしその言葉から、真剣に心配してくれていたことが分かり、少し嬉しい。

「私は、君が気に入った。家に来ないか、幸斗」

龍華は思っていることを正直に話す。

……

「な、ななななな何言ってるんですか！？　お、俺はまだそういうのは！？」

が、幸斗は違う意味での言葉だと思ったようで、盛大に勘違いをしている。

「ま、まて、私はそういう意味で言ったわけではなくだな……」

そして龍華も幸斗の誤解を頑張って解こうとしている。

そこへ、二人の人物が保健室へと入ってきた。

「何焦ってるんだい、幸斗くん？」

「何をしてるんですか、霧上さん」

上が亘で下が由香里である。ついでに二人は大量の重そうな書類を持っていた。

「あはははは！　そういうことなんだ！　そりゃ勘違いしますよ、霧上さん！」

あったことを在りのまま話すと、亘に大笑いされた。

「そんなに笑うなよ、つか、そういう意味じゃないの！？」

腹を抱えて笑っていた亘に落ち着いたころを見計らって聞く。

「それは、『家の道場に来ないか？』って意味だと思うよ。まあ、一番大事な言葉がストンと抜け落ちてるからね、無理も無いと思うよ」

「え？　道場って？」

まさか……と思いながら亘に聞く。

「だから、え？　知らなかったりする？」
「いや、もしかして……」
「そう、もしかしなくても、あの道場だよ」
そう聞いたとき、幸斗は確信した。
「お、俺なんかが御呼ばれしちゃってもいいんですかね？」
「私が良いと言っているのだ。素直にこい。そうだな……今日の放課後だ、忘れるなよ？」
「なっ！？」
ほとんど勝手に決められてしまった。
（まぁ、いいや）
心の中でかなり無理やり整理して、気になっていたことを一つ聞く。
「俺ってどんくらい寝てた？　あとその大量の書類はなんだ？」
俺が聞くと、由香里がすぐに答えてくれた。
「えっと一ヶ月くらい？　あとこの書類は霧上さんと戦った時、それ見てた教師やら生徒やらからの手紙とか書類とかかな？」

……ちょっと待て。今すごく大事な言葉が入ってたよな。

「……イッカゲツ？」

「そう、一ヶ月。」

「模擬戦大会は？」

「もう始まってる。私たちは出れないから棄権した」

「……はぁぁぁぁ！？」

ありったけの声を出してやった。

「ちょっとうるさいよ幸斗。」

ニッコリと恐ろしい笑顔を浮かべて、冷静に亘に注意された。

（というか、よく生きてるな、俺）

「こ、こほん。そ、それで書類のほう……は俺！？」

「そう、幸斗のモノだ。正直私もビックリしたがな。幸斗がこんなに強いとは思っていなかった」

……なんだか少し嬉しい。

「ちょっと悪いんだけど、幸斗って軍事の成績最悪って聞いたんだけど？」

「それが……俺にもわかんない」

超絶マヌケな声で言ったので、亘はズッコケとでも言うようなリアクションをしてくれた。

そして少し落ち着いたところに龍華が、

「ふふっ、では放課後だぞ、忘れるなよ？」

そう龍華が言うと、今までで一番可憐な笑顔を浮かべながら退室した。

しばらく、由香里以外は顔を朱に染めながら呆然としていた。

そして二人は同じことを一緒に思っていたという。

（（反則だろ、その笑顔……））

（13）保健室にて。～変な意味じゃないよ！？ホントだよ！？～（後書き）

お久しぶりです&遅れてすみません。相変わらずの不定期更新です。

頑張りましたよ？ホントですよ？1時間くらいかけましたよ？（タイピングが遅いだけ）

なんか……ごめんなさい。

あと、批判や批判や批判、あと批判とか感想とかアドバイスとかお待ちしてますので、この文才がない作者にお与えください。

おまちしてます～

（14）怒り

「にしても、模擬戦大会始まってるなんて……」

本当に残念そうに幸斗が呟く。

「でもま、他の人からの評価は上がったよ？　霧上さんと戦った時、念のために出入りできないようにしてたんだって。だけどやっぱり外からは見えちゃうからそれ見てた人は『アイツあんなに強かったけ？』みたいな感じで面白かったらしいよ」

と、亘が至極マジメに話してくれた。

それを聞いた幸斗は、

実際そんなに強くないんだけど……

と一人思っていた。

「ねぇ、どうせなら行ってみる？　学校にいても誰も居ないし、暇にはならないから行ってみない？」

どうせなら……と幸斗は考え、その提案に乗ってみることにする。

「ん、別にいいよ」

「それじゃ、いこう！」

早く見たいのか、半ば強引に引っ張られ旧市街地へと足を進めた。

「毎年毎年思うんだが、お祭りじゃん、これ」

幸斗が呆れたような声で言う。

「あはは、まあそれも模擬戦大会って事で」

そうは言っているが、亘も少し呆れ気味だ。

会場は学校のすぐ近くだ。歩いて三分もしないうちにたどり着ける。

お祭り、と、幸斗たちは言っているが、正にその通りだ。

出店やら、簡易店舗などなど、本当にお祭りに来ているみたいで、いろんな人が行き交い、ワイワイガヤガヤとどこからともなく楽しそうな声が聞こえる。

しばらく歩いていると、円状になっている建物を見つけた。

そこに何の躊躇もなく入っていく。

そこも大勢の人たちがおり、賑わっている……とは少し違うが、いい雰囲気の場所だった。

途中、いろいろな生徒に凝視されたが、あえて無視し、その視線を突っ切る。

スタンドへと続くと思われる扉に手を掛ける。そして扉を押し、スタンドへと出る。

出た瞬間に、人の歓声。生易しいものではなく、『轟音』といっても嘘にはならない。

「お～お～、すごいねぇ～」

「なにおっさんくさい台詞言ってんだ」

一応突っ込んだが、そういう気持ちも分からないこともない。やっぱりこういうのはテンションが上がる。

『旧市街地』というのは名ばかりで、実際はこんな武術大会など、少し破損物、障害物がいるような大会のために作られた、いわば『闘技場』のようなモノ。

「さぁてさて！　次の組は華麗なチームワークで予選を勝ち抜き、まるでアリのように一寸狂わずのコンビネーションを見せ付けてきた！　この試合でもそのコンビネーションをうまくキメられるか！？　見卒田中学校のチームＢ－４３だァァ！！！」

その瞬間、どっと沸きあがる歓声。それと、放送委員は気合が入っているようだ。というかアリのようにって、それはどうだろうか？

「対するもう一組は、今まで相手を風の如き疾さで相手を撃沈、その疾さで予選を勝ち抜いてきた猛者！　騎其（きその）中学校のチームＡ－１２だァァァァァァァ！！」

「うおぉぉぉぁぁぁぁぁぁぁ！！」

先ほどの歓声とは比べることすら必要ないほどの大歓声。そして『ァァ！！』が無駄に長い。

「あれ？　うちの学校だよね。」

「ん？　あぁ、騎其は俺らのトコだろ？」

そう言って、選手が出てくる扉を凝視する。

そのとき、幸斗は気づいた。

「洋介！？　お前だったのか！？」

第一番に洋介が出てくる。そのあとに一人の女、体格のいい男が出てきた。

洋介は小刀を両手に持っていて、あの中では一番普通な装備である。

体格のいい男は、身の丈をゆうに超える大剣を持っていた。しかし、無理をして持っているのがバレバレで、両手で持って精一杯の様子だった。

女はオートマチック式の拳銃を持っている。だが見た目にこだわったのか、金銀ギラギラで、機能性？　ナニソレ？　みたいな目に毒な拳銃だ。

「では、試合……開始！！」

その合図とともに見卒田の生徒が動き出した。

洋介は何の問題も無く動き出したが、体格のいい男は見るからにあせりながら動き出した。

見卒田の生徒は三人全員がアタッカーのようで、体格のいい男を三人で攻撃している。

体格のいい男も必死に抵抗しているようだが、あれはただ剣を振り回しているだけで、剣術とはいえないものだった。

そこに洋介が助太刀に入る。が、

体格のいい男は周りが見えていないようで、洋介にも攻撃が当たりそうになっている。

女はあの目に毒な拳銃を持ってじっとしているだけで、行動を起こそうとしない。

洋介は見卒田の生徒を攻撃し、一人撃沈させたが、見卒田に二人に生徒により、ぴったり同じ攻撃を受けてしまう。

そして数メートル吹き飛ぶ。

体格のいい男はまだ剣を振り回していて、あっけなく見卒田の生徒に撃沈された。

残るは開始から一回も動いていないあの女。

女は叫びながら銃を乱射する。

しかし、そんな命中もクソもない弾丸など当たるわけがない。

そのまま攻撃され、撃沈された。

そして……

「勝者、見卒田中学校チームＢ－４３！」

「ワァァァァァ！！」

結果は、洋介のチームの敗北。

洋介が負けるなど思ってもいなかった幸斗はがっくりと肩を落とした。

「てめぇがさっさと助太刀すれば勝ったんだ！　このマヌケ野郎！！」

「そうよ！　アンタがさっさと敵を倒せばよかったのに！」

「はぁ！？　おかしいだろ！？　どう見てもさっきのはお前らが悪いだろ！」

選手用控え室で、他の選手などお構いなく、怒鳴り声が響く。

他の選手は、自分が足を突っ込むわけにはいかないと、気にしながらも皆、自分の準備を淡々着々とこなしている。

そんな悪い雰囲気の中、

「いや？　どうみてもあんたらがわるいでしょ」

幸斗と亘が控え室のドアを開け、入ってきた。

「あぁ！？　よそは引っ込んでろ！！」

「ちょいと悪いがそういう訳にもいかなくてね、そこに居るのは俺

の親友なんだわ？　で、俺は本当のことを言っただけだが？」

洋介に指をさし、淡々と喋る。

「ふ、ふん、こいつだ……こいつが悪いんだ！！」

女が洋介に指を指して言う。

「君、いい加減自分が悪いって認めたら？　そもそもこの模擬戦大会だって洋介君に頼って勝ってきたんだろう？」

いままで一言も喋らなかった亘が初めて口を開いた。

「そ、それは……」

「ないと言い切れるのかい？　じゃあ聞くけど、一人でも相手を倒したことある？　この大会で」

「あ、あるにきまって……」

「嘘だな。目を見れば分かるし、しかもそんだけ動揺してたらな。まあ、あんな無駄に金掛けた拳銃使ってる奴とか、無理して使ってるの分かってる大剣使いさんとか……あるわけないよな」

幸斗が少し挑発する。そんな挑発に、いとも簡単に引っかかってくれた。

「き、貴様！　黙っておけば好き勝手にいいおって！」

すると瞬間、さっきまでの雰囲気が嘘のように、氷のような冷た

い雰囲気で、ドスのきいた低い声で、幸斗が言い放った。

「あんたらみたいなの見てると腹が立つんだよ……何の努力もしてねぇ癖に、いっちょまえに文句だけ言いやがって。あんたらみたいなのが洋介と組んだのか？　こんなゴミ屑と一緒になって洋介が可哀想だよ……いいか？　一つ忠告してやる。てめぇらは弱ぇぇ。今度てめぇらゴミ屑がこいつをバカにしてみろ？　そん時ゃ俺がてめぇらを半殺しにしてやる。いいな？」

すると一変。先ほどの勢いはどこへ行ったのか、今は半泣きで首をコクコクさせている。

「分かればいいんだよ、わかれば、な？」

「その辺にしといて幸斗。約束もあるんだし、引き上げよ」

そう言って、洋介とともに、控え室を去っていった。

控え室にいた者は、しばらく恐怖で動けなくなり、記憶に鮮明に刻まれたという。

（14）怒り（後書き）

見卒田中学、騎其中学はテキトーです。実物は無いのでご注意を。

……その～、感想、とか、いただけたら嬉しいな。

（15）道場と同情

何の違和感もなく亘が受け答えしたので、洋介は今になって亘に尋ねた。

「あ、ごめん、自己紹介がまだだったね。……僕は支堂亘。仲良くしたいと思ってるから、よろしくね、洋介くん？」

「ああ、よろしく……って俺言ってねぇじゃねぇか。……俺は村井洋介。あと、呼び捨てで言ってくれないか？」

「りょーかいした。洋介」

二人とも第一印象はいい感じのようだ。

そして話しているうちに出口に着いたようだ。

「俺、学校帰るけど、お前らは？」

そう幸斗が尋ねる。そして答えたのは洋介だった。

「俺はＮＯのバイトあっから学校へ戻るかな」

そう洋介が言うと、

「僕は、由香里と、話があるからね……」

「ふぅ～ん？　……」

一瞬だけ洋介が興味ありげな顔をしたが、そっとしておいた。

「そか。んじゃな、行くぞよーすけ～」
実にやる気の無い声で洋介を呼ぶ。そして洋介もそのやる気の無い声に従って、
「はいは～い」
と、やる気の無い声を出した。

「ほい、到着」
独り言にしては大きい声で幸斗が呟く。
「……幸斗、大丈夫か？」
「……ついにお前にそれを言われる時が来るとは」
今は学校の校門前にやってきている。……だから到着だ。

「お、来たか、幸斗」
聞き覚えのある声だったので振り返って見ると、
「幸斗、なにをボケッとしている、早く荷物まとめて来い」

龍華だった。

いわれたとおりに荷物をまとめて下へおりてきた。その途中で洋介とは別れたが。

「レディを待たすとは……、まあいい。ではいこうか」

そういうと、一人で歩き出す。

ただ単に歩き出すなら問題は無いが、歩く速度が早い。しかも荷物を持っているので、余計に早く感じた。

そんな感じで歩いて二十分。幸斗は着いていくのが精一杯、というオーラが全身から溢れ返っている。

「ここだ。私の家兼道場だ」

幸斗の目の前の建物は、大きく立派で、威風堂々という言葉がぴったりな風貌だった。

「とりあえず入れ」

言われた通りに従う。

「幸斗、着いて来い」

これも素直に着いていく。

しばらく着いていくと、威厳ある門が目に入った。

そしてその門の中から、

「……誰じゃ？」

「龍華です」

「……入れ」

と、老人の声が聞こえた。

そして龍華が了承されたのを確認すると、威厳ある門が、龍華の手によって開けられる。

「…・・・お爺様、ただいま帰りました」

龍華が頭を下げる。

幸斗は部屋の中を見た。部屋は、幸斗の想像の斜め上を行くところだった。

道場と言う割には、近代的で、剣や刀、拳銃にライフル、針や鋼糸など、色々なものが仕舞われていた。

「そちらの者は？」

「この前お話した者です」

すると突然、こちらに目を向けてきた。
「君が幸斗君かのぉ？」
と、目の前の爺さんに話しかけられた。
「え？　あ、はい、大城幸斗です」
急だったので、焦って自己紹介をする。
「うむうむ、知っておる。……それよりも、なぜお主は此処へ来た？」
「なぜ、ですか？」
「うむ」
いきなりの質問に少しうろたえる幸斗だったが、
「……強く、なりたいからです」
すぐに答えは出てきた。その幸斗の風貌は、決意、覚悟、にも見える。
「何故、強くなりたいのじゃ？」
再び帰ってくる質問。
「それは……」
一度言葉を呑む幸斗。けれどそのあと、

「……大切な、好きな人に言われたんです。『自ら諦めるな』と。俺は前まで武術、銃術なんてものは嫌いだったし、出来なかったんです。

俺は出来なくてもいいと思ってたし、出来ないのは仕方が無いと思っていました。

だけど気づかされました。その『大切な人』に。

だから俺は、その人に言われたことを全うするだけです。」

偽りの無い本心。この爺さんの前では偽りを言ってはいけない気がした。

「……ククク……そうか。分かった、いいだろう、気に入った。……今日からワシの弟子じゃ」

溢れる笑顔で幸斗に言う。それは悪戯っ子のようでもある。

「えっと……どういう意味？」

当然の疑問。いきなり龍華の爺さんに会わされたと思えば、いきなり『弟子じゃ』などと言われてみれば、十人中十人が同じ反応を取るだろう。

「だから、そのままの意味じゃ。今日から、ワシの弟子じゃ。これは自慢できるぞ？　何せワシが龍華の師でもあるんじゃからな」

さらっと重要なことを言う目の前の爺さん。混乱している頭が少しずつ正常に戻っていく。

「えぇとつまり……爺さんは龍華さんのお師匠様であり、そんな人が俺の師になると？」

「そういうことじゃ。あと爺さん言うな、師匠と呼べ。のう？」

正常になってきている頭だが、それでもまだ混乱している頭で、精一杯の言葉を口にする。

「よろしくお願いします……？」

「それじゃ本題に入るんじゃが、幸斗、お主何の得物（ぶき）を使うのじゃ？」

完全に正常な頭になった幸斗に爺さん……もとい、師匠が幸斗に聞く。

「え～っと、今日は持ってきていないんですが、二丁拳銃を使います」

幸斗が言い終えると、師匠は、目を丸くして

「二丁拳銃かの！？　珍しい。それでどんなタイプを使っておるのじゃ？　自動拳銃かの？　それとも、回転式拳銃（リボルバー）かの？」

「えっと、回転式拳銃です」

少し戸惑いながらも、師匠の問いに答える幸斗。

「回転式かの！？　こりゃまた珍しい。最近では二丁拳銃使いすら、効率が悪いやら、扱いにくいなどと言って数が少なくなっているのに、その中の回転式使いかの？　シングルアクションか？　ダブルアクションか？」

「ダブルアクションですが……」

師匠は、だんだん、ヒートアップしてきていて、幸斗も、困惑を通り越して少し、ビビッている。

「ダ、ダブルアクションかの！？それで……」

「お、お爺様。そろそろ控えてください。幸斗が困惑しています」

龍華はこういうことが何度かあったのか、少し顔を引き攣らせながら、師匠を止めに入っている。……龍華に少しだけ同情した幸斗だった。

「お、おおっと、スマンスマン。……それで、使っているものは持ってきていないといったな？　それでは今日はもういい。終了じゃ。今日は顔合わせと言うことで、な？」

「はあ……」

幸斗は顔を引き攣らせながら、返事をする。

「……そうじゃ、確か幸斗は中学三年だったな？　もちろん軍事第一じゃろうな？」

「はい、そ、そうですが」

師匠は幸斗の言葉を聞いて、ニッコリ……そう、ニッコリ笑った。

「あそこは実力がないと入学できん。もちろん、頭のほうもな？」

師匠が、言った後、龍華が言う。

「そうだな……　お前の側にいつも居る、えぇと……村井？　レベルが最低レベルだ。まあ、村井はもっと伸びるだろうから、余裕だろうがな」

「という訳じゃ。覚悟しておくのじゃぞ？」

「は、はあ……」

さっきよりもさらに顔を引き攣らせて返事をする幸斗であった。

（１５）道場と同情（後書き）

銃大好きですっ！ＬＯＶＥですよ！
いや～なんか銃見るとテンション上がりません？
サバゲーとかもうすんごいヤバイんですけど！
普段は、Ｍ４Ａ１とＳＯＣＯＭオリジナルカスタム使ってるんですけど、他にセンチメーターとか、ベレッタとかあるんですよ～
今は、ＭＰ５と、そのカスタムパーツと、Ｐ９０と、ＰＳＧ１と、ＶＳＲ１０（ボルトアクションのヤツ）、コルトパイソン、デザートイーグルが欲しいですねっ！

……今度マジで、活動報告で銃談議しようかな……

（16）マグナムリボルバー（前書き）

遅くなってごめんなさい。
一ヶ月も置いたままにしてしまって。

本当にごめんなさいっ！

（16）マグナムリボルバー

「……という訳なんだ」
「なにがと言うわけなんだ、幸斗」
「意味が分からないよ、幸斗くん」
「えぇと、も一回いって？」
「……右に同じ」
上から、幸斗、洋介、亘、呼癒、由香里である。
今三人には、龍華の爺さんに、何だか分からないが弟子にされてしまった話をしていた。
……自分で言っていてなんだが、何がという訳なのか分からない。
「だから、龍華先輩？　の爺さんに勝手に弟子にされたんだよ」
……見間違いだろうか。幸斗以外の全員が幸斗に対して、殺気……とも取れるオーラを出している。しかも『勝手に弟子にされた』と言う部分で、頭に青筋が上っているようにも見える。
そして、亘から言葉が発せられた。それはまるで、抑えていた感情が一気に爆発したかのように。
「もう我慢できない。はっきり言うよ？　羨ましすぎるよ、幸斗」
なんともまあ、分かりやすいかつ、ストレートでガツンとくる言い方だ。
しかし、言いたいのは亘だけではないようで、他のメンバーも話しかけていた。
「だよな〜。だってあの霧上先輩のお師匠さんだろ？　これ聞いた

話なんだけど、その爺さん、今まで幾度と無く弟子志願をぶった斬ってきたらしい。断るんじゃないぞ？　ぶった斬るんだ」
「あはは、いちいち怖い情報をありがとう」

あはは、とは言っているが、棒読みになっている。

「あ、あのさ、皆どこの学校目指してんの？　ほら、受験生だろ？　俺たち」
無理やり話を逸らした幸斗。本人は必死のようだが、周りは当然のように、

「軍事第一だけど。あり？　俺幸斗には教えたんだけど」
「洋介もなんだ。僕も軍事第一だよ」
「あれ？　もしかして全員同じっぽい？」
「私も軍事第一」

……あぁれぇ？

予想もしていなかった言葉に少し動揺する幸斗。

「……何、皆そんなに軍人になりたいの？」

幸斗の問いに真っ先に答える、

「ああ」
「うん」
「まあね」
「そうだ」

みんな。しかも即答だった。

しかし何故みんな軍人になりたいのか分からない。
軍人なのだから、いつ死んでも文句は言えないし、軍は上下関係が厳しい。
それに、他にもなりたい職業があるだろうに、と思ったからだ。
「う～ん、俺はな、この戦闘に関しての才能を最大限の生かしたいんだ。自分で才能あるって言うのは気が引けるけどさ、やっぱ勿体無いじゃん？」
洋介がすぐさま言う。
確かにコイツは才能があるし、カリスマ性も兼ね備えているから活躍できるだろう。
「う～ん、僕はね、ちょっと事情があってね、それでなんだ。まあ、僕自身が興味あるからね、全然いいんだけど」
亘は家庭の事情らしい。なんというか、大変なんだな、と思った幸斗だった。
「私はちっちゃい頃からの夢でね。実は私、一度死に掛けたことがあるんだ。その時に兵士さんが助けてくれたの。それでね」
呼癒の話はずいぶんと重い話だったので、少し空気がしんみりとする。しかし、小さい頃からの夢、をまだ持ち続けているのは、大したものだと思う。
「私は……別に」

由香里は教えてくれなさそうだ。何か深い理由でもあるのだろうか。
しかしこれ以上深入りするのは野暮だ。おとなしく引くことにした。

授業が全て終わり、放課後。
今日はみんな先に帰ったので一人の幸斗。
下足へと向かい、靴を履き替える。
ふと外を見ると、赤っぽい髪のポニーテールが目に入った。
そこから思い浮かぶのはもちろん
「遅いぞ、幸斗」
龍華だ。しかし本当に待たせてしまっていたようで、少し悪いことをしてしまった。
「ごめんなさい」

「フフ、冗談だ。いくぞ」
答えてから約三秒で返された。
龍華の家に着き、そのまま道場に入る。
相変わらず道場というには近代的過ぎる内装だった。
「ただいま帰りました」
「うむ、お帰り。ところで幸斗よ」
急に話を振られたので、少しドキッとした。
「は、はい」
しかし、ちゃんと答える。やっぱりちゃんと答えないと失礼だと思ったからだ。
「銃は持ってきたのかの？　できれば早く見せてほしいんじゃがの？」
「あ、ハイ持ってきましたよ。……これです」
そう言い、学生鞄から、二丁のリボルバーを取り出す。
いつ見ても、綺麗だ。美術館に飾っても大丈夫なレベルだ。……と思う。
「ふむ……ふむ！？」
ふむ、と二回言った師匠。しかし一回目と二回目とは大きく違う。
「こ、これは、マグナムリボルバー……かの？」

「ん？　まぐなむりぼるばぁ？」

そう言って顎に手を当て首を捻る幸斗。

……これを男子がやると大体残念な結果になって恥ずかしいことになるのだが、幸斗がやってもおかしくないと思ってしまう。

「そうじゃ。まさかまだこの眼でこれを見ることをできるとはのぉ」

なぜか、感動している師匠。幸斗は話が見えてこないので、思い切って師匠に聞く。

「これってそんなにすごいものなんですか？」

そう聞いた。すると師匠は懐かしそうな顔で、幸斗に話す。

「うむ。これはな、Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ５００といってな、昔ワシも使っていた代物なんじゃよ。しかし……」

師匠は、少し間を置き、また口を開いた。

「これは片手で扱うことは難しい……いや、ほぼ不可能の銃じゃ。現にワシも数々の修羅場を潜って、二丁で撃てるようになった代物じゃ。それにもうマグナム銃は、伝説とまで言われて数が少なくなってきているのに、それなのに何故二丁も……？」

片手ではほぼ不可能。

この言葉は間違っていない。現に、幸斗がこれを初めて撃ったとき、軍事教練の銃とは比べ物にならない程の、反動と重さだった。

そのせいで、幸斗の両手は今包帯が巻かれている。

撃つのが難しい理由がたった今やっとわかった幸斗は、

「それ、一丁撃つのだけで精一杯です」

と言った。しかし師匠は

「撃てるだけで凄いぞ。これを撃ったら、手の中で何かが爆発しているよう、とも例えられるんじゃぞ」

と、驚いたように言った。

そして、少し考えた動作をする。

う〜む、と考え込んでから約五分間。閃いたような顔をする師匠。

「もしかしたら、幸斗なら撃てるようになるかもしれん。いや、それだけじゃないじゃろう。撃てるようになれば、軍事第一の戦闘テストは合格できるかも知れぬ」

「えぇっ！？　そんなに凄いことなんですか！？」

合格、と聞いて驚く幸斗。

「うむ。ただでさえ数が少なくなっているマグナムの持ち主じゃし、それにリボルバー使いという稀少な人材じゃ。それの二丁使いなど、学校が放っておくわけがなかろう。それに幸斗自身の射撃能力も高しのう」

ん？　と少し引っかかることを言った師匠。

「なんで俺の射撃能力が高いって決め付けてるんですか？」

「ん？　それは龍華から話は聞いておる。なんでも、龍華の一撃を銃弾を当てて軌道をそらしたそうな。じゃろう？龍華よ」

「は、はい。私の一振りを逸らされました」

なんとまあ、耳が早い師匠だと思う幸斗。
それと別に凄くは無いのでは？　と思ってしまった。

「まあ、とにかくじゃ。軍事第一の受験まで、猛特訓じゃな。覚悟するように」

うへぇ、と心の中だけで思う幸斗だった。

（16）マグナムリボルバー（後書き）

S&W　M500分かる人います？
リボルバー大好きなんで、選びました。

（1）新しい、かもしれない始まり。

「そこまで！」
大きな声で筆記試験官だと思われる人が戦闘をしていた少年ともう一人の戦闘試験官に言う。
少年はふぅ、と言った後闘技場から出て行った。

「さっきの、合格だ。……次２０４８６番、大城幸斗」
戦闘試験官はもう一人の筆記試験官に小さく言い、その後、単調な大きな声で言う。

「……はい」
大城幸斗と呼ばれた少年がＤと描かれている試験闘技場と思われる所へ入る。

そのまま入ろうとする瞬間に、中から出てきた少年が幸斗へと話しかける。

「頑張れよ？　まあ、幸斗なら簡単だろうがな」
「よく言うぜ、洋介も余裕だろ？」

洋介、と呼ばれた少年は両手に薄く、軽そうな機械刀を持っていた。
軽そう、とは言ったものの、簡単に扱えるものではないということは洋介の手を見ればすぐに分かってしまう。

包帯でグルグル巻きにされた両手。

恐らく手の肉刺(まめ)が何回も重なって出来ているだろう。

洋介はその機械刀を背負い、まあなと幸斗が聞こえる程度に言った。

幸斗は洋介のその言葉にフッと、小さく笑った。

「……ふぅ」

幸斗は一度深呼吸をした。

そしてそれを整えると、後ろに吊るしていた二つのスタイリッシュなホルスターから大口径回転式銃――リボルバーを取り出した。

片方は銀に輝くリボルバー。

片方は黒に少しの銀のリボルバー。

どちらも美術館に飾っていてもおかしくは無いと言える立派な銃だ。

しかし、そのグリップ部分にナイフ、タガー、小刀とも言える刃

物が――本物ではない――着いていた。
それは固定している訳ではない様で、取り替えられるようになっている。
若干その刃物に慣れていないような素振りを見せたが、特に問題は無いと言う風な顔つきになる。
一度幸斗は銃の感触を確かめる。
――よし、大丈夫。
そう安心するにはそう時間はかからなかった。
幸斗は試験闘技場へと足を運ぶ。
中へ入るとすぐ、筆記試験官からの説明がされる。
「これより、試験番号２０４８６大城幸斗の戦闘試験を行う。試験には閃光模擬弾を使用する。戦闘不能と判断した場合はすぐに試験は終了とする。
では五秒後に開始とする。……始め！」
本当のところ、筆記試験官の話など聞いていなかったが、開始のところだけはしっかりと聞いていた。
ギシッと、地面を踏み込む音。

緊張をしていそうだがそうでもない。
幸斗はいたって普通の表情をしており、余裕な表情は見せていないが、特別に緊張はしていなかった。

一瞬、不敵な笑みを浮かべる。
それは少し楽しそうで、嬉しそうにも見える。

その行動と一緒に――――

地面を蹴った。

（1）新しい、かもしれない始まり。（後書き）

第二章、開幕です。

これは第二章のプロローグ扱いですので、短いです。

……剣とかって、男のロマンだと思います。

（3）入学式

「はぁぁ」
「どうしたんだよ？　入学式早々」

幸斗がため息をつく。
それを冗談げに訊ねる洋介だが、洋介が考えているよりも深刻な顔をしている幸斗。

「いや、あの試験官さん……じゃなくて教員さん大丈夫かな……」
「あぁ、それは誇って良いんじゃないか？」

洋介が明るい雰囲気で言う。

「なんたって、軍の選抜で選ばれてんだろ？　ここの教員って。だったらお前はその最高峰の実力者を倒したってことだろ。それも一瞬で。
絶対注目されるぜ、お前」

洋介がそういうと、幸斗はやれやれとでも言いたそうな表情をし、洋介に言った。

「その注目が嫌ャなんだって。下手したら変な奴らに目ェつけられて、面倒なことになるかもしれないし」
「そんなのはお前の実力でどうにでもなるくせに」

幸斗はもう何を言ってもムダだということを確信した。

「はぁぁ」

またため息をつく。
気が付かぬうちに下足へと着いていたようだ。

この学校は広い。そして豪華だ。
現に校門はよほどの爆発技術能力者か、大きな建物を一瞬で爆破するぐらいの爆弾がないと強行突破はできないだろうと思うくらい、頑丈そうで、そして警備が厳しかった。

今なら三個中隊ぐらいがこの学校を制圧しにきても破れないだろう。

それに設備も充実しているようにも見える。
途中で見た水が溜まっている――プールではない――場所では、清潔で広く、一つ一つの物も最新の設備だった。

もちろんこの下足も例外ではなく、一年生のフロアもムダに広かった。

そんなことばかりに目を向けていた幸斗は近くで言われたことで眼点が変えられた。

「あ、あの試験官さんだ」

幸斗は慌ててそちらを向く。
そこには松葉杖で歩いているあの試験官さんいた。

……やっぱり可哀想なことしちゃったかなぁ

と、一人思う幸斗だった。

幸斗たちは講堂へ来ていた。
ここもそれなりに広く、二階までである。
幸斗たちは前の方へと座っていると思ったが、前はまだまだあるらしく生徒がかなり座っていた。

入学するのが難しいという割には、生徒の数が多い。
それだけ技術を使える者が多いということだが。

そんなことを考えていると、正面以外の電気が消えた。
そして、四十代後半の格好良いおじさんが出てきた。

「えぇ、みなさんおはよう。そして、はじめまして新入生。入学おめでとう。
私は紫電（シデン）　双一郎（ソウイチロウ）上位中将だ。校長をさせてもらっている。
制服は気に入ってくれたかな？　全て戦闘服を元に作っているので、どんなに動いても損傷しない作りになっている」

あたり触りの無いことを話す紫電。
そして本題へと移る。

「さて、さっそくだが君たち新入生に知らせたいことがある。君たち新入生はこの学校でいろいろな軍関係のことを学んでもらい、その学んだことを我々日本国軍に役立て、貢献してくれることを願っている。以上だ」

……ここの校長はありがちな『話が長い校長』ではないようだ。

「ありがとうございました。次は全校生徒を代表して、生徒会長から一言です」

そう前に立っている生徒が言うと、奥から黒髪のストレートヘアーの女子生徒が出てきた。

「ただいまご紹介に与(あずか)りました、生徒会長の見沢(ミサワ)　由梨(ユリ)です。皆さん新入生には、この学校で素晴らしい三年間を過ごして頂けたらな、と思います。以上です」

完璧なスピーチをした生徒会長。
大きい目に長いまつ毛。
細い眉毛に整いすぎた口と鼻。
その上品な雰囲気も合わせれば、どこかのお嬢様と言われてもまず疑わない。

なんというか、色々と反則な生徒会長、見沢由梨である。
現にもうすでに見とれている生徒がちらほらしている。

……その中に洋介もいた。

ここは、今から幸斗たちが色々なことを学んでいく一年のＡ組の教室。

簡単に言っているが、ここにたどり着くまでが大変だ。

まず此処は教室棟。他には実習棟、訓練棟、委員棟などがある。厳密に言うとまだ他にもあるが、主に使用されるのは今あげた棟だ。

しかし広い。ここは学校なのか、と疑うほどに。

部屋数もかなりあり、使われていない部屋も少しだがあった。

だが、この学校全ての設備、部屋などを覚えるのは少し骨が折れる。

それにしても、

「先生まだなのかぁ？」

一人の生徒がみんなに聞こえる声で言う。

先生が来ない。他の教室ではもうとっくに授業が始まっているのに。

ざわついている教室。

だが、前の扉で大きな音がした瞬間、そのざわつきはいとも簡単に静まった。

「すまん、遅れた」

女の人の声。

そのひとかけらもすまないと思っていない声を出したと思うと、前の教壇に一瞬で立った。

一瞬で。

十中八九技術だろうが、展開術式無しでの技術など聞いたことが無い。

皆が唖然としている中、何も無かったかのように話し始める女性。

「今日からお前たちA組の担任になった咲丘（サキオカ）　未来（ミライ）だ。覚えておけ」

担任の教師の咲丘は、はっきりといった。

気が強い性格のようで、この迫力はどこから出てくるのだろうか。

大体みんなが我に返ると同時にまた咲丘が話し始めた。

「さて、入学おめでとう。

早速話に入るが、お前たち新入生には入学したと同時に、『三等訓

練兵』の階級を取得してもらっている。
ここは軍事学校だ。様々な軍事訓練を受けてもらう。ある程度は自分の得意な分野を選択できるので、頭の片隅においておけ」

短いブロンドの髪を触りながら言う咲丘。

その時、丁度チャイムが鳴った。

ふう、と一息つくと咲丘は表情を少し変え、言った。

「……では、一時限目を始める」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9337m/

夢に進む少年

2011年4月6日07時32分発行